

爆心地から500メートル以内 奇跡の78人に寄り添う

広島に世界初、原爆が投下されて72年以上が過ぎたが、被爆者がその後、どのような人生をたどってきたのか、その境遇についてはあまり知られていない。被爆者の平均年齢が81歳を超えて当事者が少なくなっている上、今も「当時は思い出すのはしんどい」と口を閉ざす人が多いからだ。



78人のデータを記録したファイルを広げて説明する鎌田さん。01年からは16年にわたり広島原爆養護ホーム倉掛のぞみ園園長を兼務。被爆者の養護にも尽力。2017年度広島市民賞を受賞した。

爆心地から 生きる

そんな中、広島大学原爆放射能医学研究所（現・原爆放射線医学研究所）が1972年から始めた「原医研プロジェクト」に注目が集まっている。爆心地から500メートル以内で被爆し、奇跡的に生存が確認された近距離被爆者一人ひとりを45年にわたって健康、精神的な影響だけでなく、生活や家族関係も調べ、被爆の実態に迫った。同大名誉教授で原医研元所長の鎌田七男さん（80）が臨床データ、調査票、染色

体や血液の検査標本など資料の一部を寄贈し、昨年8～10月にかけて広島大学医学部医学資料館（広島市南区）で公開された。原爆を振り返るとともに、現在の福島の問題を考えるきっかけにもなると反響を呼んだ。「調査を今日まで続け、明らかになったことは、原爆は重複がんや髄膜症を発症させるだけでなく、人間を遺伝子まで傷つけるということ。原医研を退職するまで1万7655例の染色体を分析し、白血病で4夕

イブの融合遺伝子、異常の構造を解明しました。早期発見の方法や、90年代から登場する治療薬につながったのは、再びあつてはならない被爆者の病態から得られた知見です」一人ひとりの記録が書かれているファイルを見ながら、鎌田さんは振り返る。

鎌田さんは満州奉天（中国瀋陽）で生まれ、敗戦後両親の故郷・鹿児島へ向かう前に、結核で父（享年56）を亡くす。後に福岡に移住し55年に広島大学医学部に入學。卒業後の62年に原医研助手として入局した。

「原医研プロジェクト」は、68年に当時、原医研所長の故・志水清さんとNHKが共同で取り組んだ「爆心地図復元作業」がきっかけ。

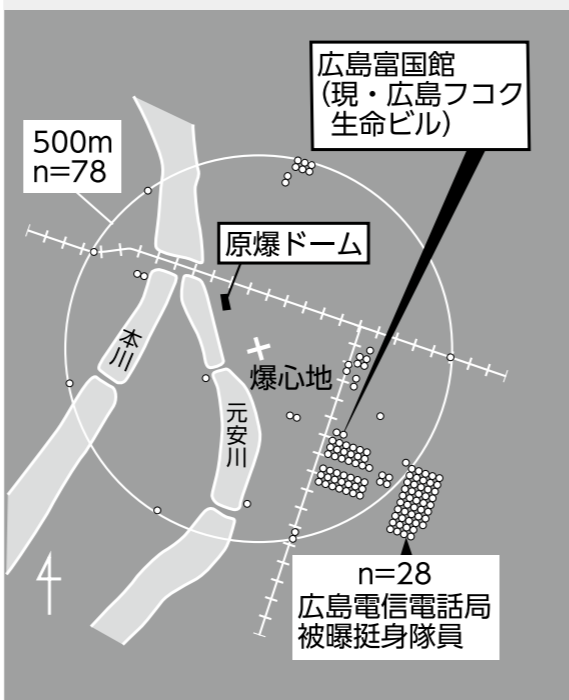
平和記念公園となった中島地区に住んでいた人たちに声をかけて、当時の街並みを地図上に書きながら、各世帯の被爆状況を掘り起こした。

当時助手で後に同大総合学部教授の故・湯崎稔さんが、聞き取り、確認をしながら「被爆関係基礎調査・世帯票」を作成した。

対象を爆心地から500メートルに広げて、奇跡的に助かった78人の存在がわかり、後に鎌田さんは健康調査にあたることになった。

アメリカと北朝鮮の挑発行為がエスカレートする中、一触即発の局面を迎えている。核の抑止力は「核」ではない。核によって遺伝子や人生を破壊された被爆者の声こそ、抑止力になる。広島爆心地500メートル近距離被爆者と、生き残った78人に寄り添い続けた医師の命のメッセージ。

村田 くみ ジャーナリスト



爆心より500m以内被爆生存者(78名)と旧広島電信電話局被爆挺身隊員(28名)の被爆地点(出典「被ばく者と共に」より)

は東京から派遣されてきていたことが多く、地元に戻って亡くなった人もいます。広島の人だけでなく仕事で広島に来ていて被爆した人もいたことも知っておいてほしい」（鎌田さん、以下同）

重複がん、孤児、離婚…… 幾重もの困難が襲いかかる

原爆による身体への障害は、被爆後4カ月以内に発生した「急性期障害」と、それ以後に出現した「後障害」に分けられる。「急性期障害」は、身体のだるさ、脱毛、出血、下痢や発熱など急性放射線障害の症状を訴えると、2週間ほどで亡くなる。さらに、血液を作る骨髄が動かなくなる。腸から潰瘍性出血などが起こり6週間ほどで死に至る。

「後障害」では、がんが多く、被爆してから5年後に白血病、10年後頃から甲状腺がん、20年後には乳がん、肺がん、30年後には胃がん、結腸がん、40年後には皮膚がん、髄膜腫（脳腫瘍のひとつ）が増えてくるという。また、被爆者の白血病の特徴は、放射線量の増加に比例して、白血病的増加がみられたこと。被爆時の年齢が若いほど白血病を発症する比率が高く、発症ピークは被爆後7～8年の1952～53年だった。そして、16年9月に鎌田さんが発表した論文「大線量被爆生存者78名の被爆後70年までの追跡調査結果」によると、被爆した放射線の推定線量は、2000～2999ミリシーベルト（mSv）が18人、3000～3999mSvが6人、40

00mSv以上が8人で、最も高い人が6900mSvだったことがわかった。

一般的に500mSv超の被曝があると白血球の減少がみられ、4000mSvで半数が死亡するとされており、極めて高い値だ。

78人のうち66人（被爆後70年の時点）がすでに死亡し、主な死因はがんが30人で、生存者を含めて35人ががんを患い、このうち7人が重複がんになっていた。死因は続いて、脳・心臓血管障害が21人。事故その人は15人だった。

もちろん、当時は放射線障害による影響などということはわからない。体調不良の原因がわからず「ぶらぶら病」などと言われて虐げられた。

「被爆者の多くは、家を焼かれて無一文同然で焼け野原に投げ出された。財産をなくしても頼れる親族もない。『休まれては困る』と体が弱い被爆者は企業に採用されなかった時期もあった。自治体は日給240円の『ニコヨン』と呼ばれる失業対策事業を提供したが、土手を築いたり、公園の掃除をしたりするなど、肉体労働で不安定な職ばかりでした。

原爆の被害が健康だけでなく、生活の面にも及び、被爆者の人生を大